

殺菌剤耐性ブドウ晩腐病菌の発生について

平成24年9～10月に、県内のブドウ（ピオーネ）簡易被覆栽培圃場で晩腐病菌を採集し、殺菌剤に対する感受性を寒天培地上で検定した結果、ベノミル剤（ベンレート）及びアゾキシストロビン剤（アミスター）に対して感受性が低下した耐性菌が本県各地で確認されました。なお、感受性の低下は寒天培地上で検定したのみで、圃場試験での薬剤防除効果の低下は確認していません。

（1）県内における殺菌剤耐性菌の発生状況

- ・ 県内(12市町)のブドウ（ピオーネ）簡易被覆栽培圃場の晩腐病発病果粒から採集した289菌株を用いて、寒天平板希釈法で殺菌剤感受性を検定した結果、ベノミル剤では耐性菌株率46%、アゾキシストロビン剤では耐性菌株率51%で、広く耐性菌が確認された。
- ・ 他県では、寒天平板希釈法でベノミル剤またはアゾキシストロビン剤に耐性と判定された晩腐病菌に対して、圃場試験でベノミル水和剤またはアゾキシストロビン水和剤の防除効果の低下が報告されている。

（2）防除上の参考事項

- ・ 耐性菌は、同系統の薬剤に対する感受性も低下している可能性がある。
- ・ 今回耐性菌が確認されたベノミル剤及び同系統のチオファネートメチル剤は、これまで発芽前散布に用いられてきたが、本年度からはイミノクタジン酢酸塩剤が主体となっている。
- ・ アゾキシストロビン剤、クレソキシムメチル剤（ストロビー）（両剤ともストロビルリン系剤）及びファモキサドン剤（ストロビルリン系剤と同様の作用機作を持つ）の使用は1作期いずれか1剤1回を上限とし、他系統の殺菌剤と組み合わせた体系で使用する。
- ・ 晩腐病に予防効果の高いマンゼブ剤を含む薬剤のうち、ペンコゼブ水和剤、ジマンダイセン水和剤は、昨年11月に使用基準が変更され、簡易被覆を含む施設栽培での使用時期が「開花前まで（マンゼブ剤を含む農薬の総使用回数2回以内）」から「収穫45日前まで（マンゼブ剤を含む農薬の総使用回数2回以内）」に拡大されている。これらの薬剤は、果粒小豆大期までに散布すると果粒の汚れが少ないと考えられる。

なお、農薬の使用に当たっては農薬使用基準を厳守するとともに、ドリフトに注意するなど安全・適正に使用するようお願いします。

この情報は、岡山県病害虫防除所ホームページでも公開しています。

アドレスは、http://www.pref.okayama.jp/soshiki/kakuka.html?sec_sec1=239 です。